

Vol. XXII, Nos. 10~12

October~December

植 物 研 究 雜 誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 22 卷 第 10~12 號 (通卷第 237~239 號) 昭和 24 年 4 月發行

前 川 文 夫*: アケビとアザミとアセビの語源

—植物の語源の探究法について—

Fumio MAEKAWA: Comparative method in the
etymological studies of Japanese plant names.

植物の名の語源については古來澤山の見解が發表されている。いづれも一理あるがそれにもかゝらず成程とうなずかせるものに乏しいのは事實である。これは從來の國語學者の手に委ねられていた語源考が恐らくは命名の本來の歴史的展開とは遊離した見地に立つて單なる辭句や文字の音の上の扱ひに終始してしまつたことや、その名を負う植物の實體とその當時の人との接觸點が全く考慮されなかつたことに大きな原因がある。その點で言語學、民俗學、植物學等を貫ねた立場から、柳田國男氏、牧野富太郎博士、武田久吉博士、松本信廣氏等の語源に對する考察が發表されていることは、まことに喜ばしい事であるが、何分數多い植物の名からみるとまだ明らかにされていない點が多いのである。私も語源には關心を持ち、又植物學には關係があるので、上記の諸氏の驥尾に附していさゝか考究を試みている。何分にも語源の扱ひは明瞭な變遷の跡を残すもの以外は極めて臆測に陥り易いので、十分に注意を重ねて科學的に追及の方法から逸脱しない様に勉めているので、中々はかどらない。

語源の探求は一種の歴史の探求であるといえる。それは實驗を可能とする分野ではないから、主として比較の用法をとらざるを得ない。即ち問題の名の構成部分を、それと同時代に出來たと認める他の植物名のみならず、動物名、器物名、習俗の用語、地名、方言等の中に求めて、若干の數が見出され、しかも共通の特徴的な意味がそれらの間に見出される時に、はじめてこれは曾つては關聯を持つていた古語の殘片と認めて先へ進んで行くのである。發音の種類は限られた少數であるのに概念はきわめて多い、従つて從來の音毎にバラバラに切りはなして一音づきの意義を搜し求めたら何とでもひねくり廻すことは出来るのだからまことにこわいのである。上記の方法を假りに共通言語摘出法と呼んでいるが、今のところはこれ以外にしつかりしたよい方法は見付からない。既

*東京大學理學部植物學教室

に相互に變形してしまつた言葉や名の間に共通部分を見出さねばならぬ事が多いのだから極めて困難に満ちている。その上古くは徳川時代の研究家から現代の諸家に到る迄、植物名の語源を扱つた國語學の分野の從來の方法のために物から浮き上つた語源の考察と觀念とが一般に強く導入されている。加えて明治以來の方言の排除の強制と小學校の教育によるいわゆる標準語は、切角残つていた物と名との連絡をこわしてしまつて、今では探求の手掛りは失われたもの、混亂したものが多から一層厄介な事になつた。近くは太平洋戦争末期に全國的に行われた小學兒童の山間田園への集團疎開の事實も恐らく方言の混沌に輪をかけたろうことも、方言探求上これから後には注意を要する事であろう。こうした惡條件下に仕事を進める困難さは讀者諸賢も察して頂ける事と思う。

語源の考察に當つて、今一つ重大な點がある。それは命名という行爲があつて名稱という結果が生れ、その結果が後へ残つて行くのに、必然的に入用な條件のことである。名は必要が生む。云い換えれば、物が生活に關聯を持ち、そのために他の物から區別する必要を生じてはじめて名が入用となるのである。この事は柳田氏も「地名の話」の中で述べて居られる。従つて生活に密接な關聯のあるもの程、細かい名が多數用意され、又その關聯の歴史が古ければ古い程、その名も亦古い歴史を経て來ているに相違ない。たとへごく新しい時代の遊戲的の命名であつても、その命名者にはそれ相應の必要があつたのであり、それが残る時はその時の社會にそんな遊戲をも許すだけの餘裕が出來ていたことなのである。しかし古い名の場合は極めて重大であつたと思はれる。その物に生活上大きな關聯を持つ當時の人々が、暗黙の内にその命名の正當性を認めたからこそ、ある一つの名がかくも廣くひろがり、かくも永く續いて來たのである。そこには廻りくどい説明やもつたいをつけた意義や個人の趣味は存しなかつた——とはいへ切れないが、たとえ存した處で恐らく殆んど後に残る機會は持つてなかつたと見るべきである。植物の名もそうであろう。端的にそのものゝ姿なり、利用點なり、注意點なりを簡潔にしかも他とまぎれなく表現した名が、恐らく誰を命名者というでもなく生み出され、そして一般の人々の考えと一致して自然に受け入れられ、残つたのがその大部分であると見て差支えないであろう。

かゝる見地からみて「採集と飼育」第 10 卷第 9 號（昭和 23 年 9 月）に登載された田中忠夫氏の「植物語源考」の行き方は全く相反するものであつた。同氏の理論の展開は次の二つの部分から成るようである。一つは日本は古代中國語を輸入同化し、これを語詞の根幹として母音添化、音韻變化、接尾辭添加等を加えて國語としたという事である。これは當時のいくらひいき目に見ても文化の低かつた日本側が、高い文化を持つた中國側から受け入れる物が多く、それに伴つて言葉や名も入つたことは勿論あり得ることで問題はない。が今一つの部分即ち中國文字學の規定に従つて中國語による名を同義又は類義の他の中國語の發音を以て置換したものを國語としたという點に到つては大きな疑問を抱かざるを得ないのである。

彌生式土器文化の遺蹟は全國から多く發見されているが、その遺蹟から明らかに生活の一部に加つていたと見られる植物はイネ、ウリ、フクベ、モモ、スギをはじめ多數出土して、植物が密接に關聯していたことはわかる。又萬葉集に現はれる古代の生活は野外の有用植物に多大の關心を寄せていることを示して、こうした生活環境が奈良時代になつて、にわかになされたものとはとれない。ずつと古く恐らくは彌生式文化の頃からつづいたものゝ名残りだとさえ見られる。そうした時代にも勿論大陸との間に關係はあつたが、一々の重要な植物の名を中國語を輸入するまで無名の儘で用を達していたとは考えられない。又若し中國語を輸入する事があつたとしても、その時はその名をそのまま輸入し、そのまま——多分に片言にはなるだろうが——の發音を利用したと思われる。まして同氏が論じられた様に、例へばアケビは中國語では丁翁だから、この丁翁の丁は當にあたり、ついで一亢一昂一高一上一升一聳→阿克→アケとなる。一方翁は老一衰一微→ビであるから丁翁は即ちアケビの名の起源であるという風に、或は同義の別文字にうつし、更にこれを同音異義の別文字に乗りかえるという事をして名を決定したなどとは全く想像も出来ない。これがたとえば丁→當で當にあたる發音が残るついでこれが亢の發音にうつつたというのなら一つの推定としては可能である。然るに上記の解説はそうではなくて、恐らくは命名の當時に於ける推理に概當するのであるからたとえ一人がこれを考えたとして他の大勢が當然だとして受入れるとは思はれぬ。これは植物名を逆に古代中國語と現代に於て結ぼうとしたものであつて、この事は氏の擧げた例中すでにアシの蘆、アジサキの紫、アセビの馬、アツキの荅、アツサ（これを木王だという）の木のように全く音義共に異なる文字が數ヶの文字を轉々するとみな壓及び按に落ちついて、いづれもアツの語源となるということ夫自體が強いて關係を付けようとするをよく示している。かくの如き自由放奔、變轉自在の轉換が出来るならば大抵の語源は自分の好む處に導くことも出来るであらうと思はれ、理論的な考察からははずれたものと見られる。私は古代中國語については全く知らないからその點については批評することは出来ない。たゞこゝには、中國語の導入まで全く名なしに生活していたとすることは無理であつて相當多數の植物名は日本語として出来ていたろうということ、又中國語を導入する際には、命名の最初にあつて中國語の名と音義それぞれ全く別の文字を多數經由して立てられた名がその使用者としての一般の人達から受け入れられてそして今に残つていゝとする可能性はまずむずかしいという事だけをいゝたいのである。

前にもちよつと觸れたように古代における名は端的な表現であつた。そのごく少數は現在では解析不能の發音の纏りであるだろう。しかし多數はやはり大きな概念を表現する語幹と、それに限定を加える區別の用語との組合せとして成立つていたとみてよい。そしてその區別の用語は廣く植物以外の名や用語の中から、共通の概念で導き得る可能性のある言葉なのである。

さて大きな概念を表現する語幹として、私が重視する言葉の一つにミ（實）がある。實はなにも植物の果實だけを示すのではない。實體を示す身（ミ）であり中實（ナカミ）のミを含んだ概念を示すもので、廣く、太く、中味の充實した實質のあるものを等しく包括していた。しかも音便でミ→ビ→ベの移動もあつた。植物のクルミ、シキミ、ハジカミなどは果實の類だが、ワサビ、ワラビは實體のある部分を食用とすることから來たろうし、同じ形式は動物のアワビ、エビに残存している。このミ——ビがアケビ、アザミ、アセビのミ——ビにも概當する。アケビは實を食用にするし、日本の山野に極めて普通であり、アザミは若菜として食用にする習慣は中部以北の山間に今も残っている。アセビは有用にはならない、寧ろ有毒植物として著るしい一つで、その果實は殆んど一年を通じて葉叢の上に乗つかつてよい目じるしとなる。

アケビとムベとは同じ科のものだが、分類上の位置を知らない古代人でも、似たもの同志とは察していたらう。どちらも甘い實になる。そして重大な區別點はアケビは實が裂けるのであり、ムベは閉じたまゝに終ることなのである。アケビを熟期の相違から「秋のムベ」即ちアキムベだとする説（柳田氏）もあり、又「開けツビ」だとしてその實の形態を女性の性器に聯想した古代人の開放的な點を強調した説（黒田畔存）もある。しかし私は果實を食用とする時期に示す重大な區別點がそのまゝアケビ一群の區別の用語に用いられたと見るのである。即ちアケビは「開く實」アケ+ミ→アケビであるし、一方ムベについては、ムは閉じたことを示す。口を閉じたまゝの發音はムに近くムで表現される。ベはビの轉訛であらう。閉じた實即ち ム+ミ→ムベ でアケビと對立した名稱である。

アザミは痛い葉を持つている。これは今でもとげのあるものゝ引き合いにすぐ出される植物である。このとげは若い葉ではまだ硬くないから食用にはごく若い葉をちぎつて使う。とげのことが古くはアザであつたと思われ、これはとげの多い粗糙、ざらつきをさしてもゐたようで、アザラシのアザもその名残りと思いたい。この見方の證據として琉球に多くて有用なアダン（タコノキの仲間）で、葉に猛烈な刺が並んで居るが、これに對して石垣島に残るアザミの名は刺のある木の意味をよく示している。（宮良當壯氏、文學 1 No. 3（昭和 8 年）による）。又日本における言語の變遷は中央に變化が起つては、その變化が次第に邊境に及ぼして行くから、邊境には時間的に古い言葉が残ることがあるという柳田氏の説に従えば、このアザミは古い言葉とみられる。こんな點からアザミは刺のある實質を持つもの、アザ+ミ→アザミだと思っている。

次にアセビ。シャクナゲ科の中でこの類とシャシヤンボの類とは分類上は大分遠い。しかし白い鐘状の花が幾つかぶら下がり、可愛い實になること、又葉や樹勢の印象は極めて近いといつてよく、その程度はよく古代人の感覺を以てしても多分同一概念下に置きうるものであらう。この仲間に、割に新らしい名ではあるがイハハゼとナツハゼとがある。後者ナツハゼはハゼノキの如く鮮やかな着色が夏の葉に見られるというのが一般

の語源考であるが、私はこのハゼがアセビのアセと通づる古型の残つたものと見たのであつて、アセビは古くハゼビ又はハゼミであつた。ハゼ \longleftrightarrow ハセは走る、割れるの意味で近江の入走(やばせ)のバセ、炭がハゼ、栗がハゼるのハゼである。ハシドイという木は今は深山にしかなくなつたが、これは山に狩りする人達が山の中で燵を探り、米を炊けた際に燃え易く火力の強い木についてよく區別をしていたのであるが、このハシドイは燃え易くしかも火中でひどくハゼる癖があるのを知つて、それでハゼノキであり轉じてハシドイになつたと思はれる。ワサビもこれと似ている語源である。たゞハシルものが違う。もうおわかりかも知れないが、あの獨特の辛味はツンと鼻へ走つて泣かされる。これを端的なワサビの表現で、他の片言隻句を要しない。即ちハシル實質あるものであつた根幹の太さは實、身というにふさわしく、音便でワサビであろう。大言海に云う惡(ワル)、障(サワリ)、疼(ヒヤク)の三語の頭を連ねたとする如き廻りくどくしかも適切でない名は古代の語源を示すものとは思われない。

アセビはその仲間では唯一の有毒のために注意を要する木であり、しかも最初の文化の開けた近畿地方にはきわめてありふれた木で、日常生活に及ぼす危険は山中の稀にしかないものとは比較にならぬ。この木は他の連中と違つて殆んど一年を通じて割れた即ちハゼた小さな果實の總を枝の上につけていることで樂に見分けがつくのであつたからハゼミ \rightarrow アセビであろう。日本の特産に近い(中國の本部に多少あるが、珍らしい部類に屬する)から今は別として古く馬醉木などという漢名があつたわけがなく、中國の古い書にもこの名は見當らぬ。馬醉木は牧野博士のいわゆる漢字名である。私はさらに次のような發生の可能を考える。奈良朝以前に來朝した北支系の中國人が同じく持つて來た馬がこの植物を知らない爲に屢々害を受けたことから特別に注意を拂うようになり、名の必要も生じ、それらの中國人が日本の土地で、さすが文字に練達の士の集團だから馬醉木として事實と共に日本語の發音 a-se-mi, a-si-mi に似せて ma-sei-mu としたのではなからうかと考えるのである。當時の新らしがりやの日本の智識階級の一部は早速これを採用し、しまいには却つて大陸から持つて來たまゝの名かの如き錯覺を起して今に到つたのであろう。

以上少しく長々しく述べたが、植物を多少とも知り又植物を愛するものとして、その呼び名について田中氏の論說の出たのを機會に、從來から進めていた考察の一端を述べて讀者の方々の御批判を仰いだ次第である。なお上述の見地からすゝめた語源考察の詳細は北陸館から近く「木の名草の名」として出版される筈であるから御覽下されば幸である。